

幕末明治の写真師列伝 第百二回 宮下欽 その二十四

ここで少し書き忘れたことがあるので記すと、午札騒動の際に宮下欽次郎が一揆鎮圧のための部隊の一員として出動して、ミニエー銃等軍備品紛失に関わっていたことが以下の資料から判る。

『信濃国松代真田家文書』

① (包紙) / (軍備品紛失関連書類綴 明治4年3月～8月) / (軍備品関連書類一括 明治3年3月)

作成・差出 大島春水・宮下鉄次郎

貼紙「中野騒動之節、旧二十四丁中銃ト引替有之追々式丁者誰々之分御庫ニ有之哉」

『史料目録 第90集 信濃国松代真田家文書目録(その11)』
(2010年3月、国文学研究資料館)

②「大島春水他1名達書(ミニエー銃等紛失につき) / (軍備品紛失関連書類綴 明治4年3月～8月) / (軍備品関連書類一括 明治3年3月)

(明治4年) 辛未8月13日

大島春水・宮下鉄次郎

軍監御中

『史料目録 第90集 信濃国松代真田家文書目録(その11)』
(2010年3月、国文学研究資料館)

③「(端裏書) 大砲運夫江御賞之義御内々伺御賞関係書類御賞筋関係書類一括

(下ケ札あり、端裏貼紙指示書 明治4年辛未10月 1枚・横切紙)

大砲方大島春水・宮下欽次郎

『史料目録 第89集 信濃国松代真田家文書目録(その10)』
(2009年3月、国文学研究資料館)

この資料から、宮下欽次郎が明治4年(1871)8月頃までは松代にいたことが確実に判る。最後の③は、宮下欽次郎が明治4年(1871)9月11日、兵部省出仕、二等軍曹に任じられていることから、後付けで出された褒賞の関係書類であろう。

さて、軍籍を離れた宮下欽次郎がその後、どうして写真師になる道を選んだのかを探る参考として、2012年12月23日付『新潟日報 上越かわらばん』の石塚正英「くびき野学への誘い 文明開化の写真師—鹿野浪衛・末四郎兄弟」、石塚正英『地域文化の沃土 頸城野往還』(社会評論社、2018年)所収の「文明開化の写真師—鹿野浪衛・末四郎兄弟」がある。鹿野浪衛とはどういう人であったかといえば、永井誠吉『松代藩戊辰戦争記』(印刷:コロニー印刷、平成2年)によれば、戊辰戦争に参加した松代藩八番狙撃隊の隊士にその名がみえることから、松代藩士であったことは確かである。

そこでまた国立史料館編『真田家家中明細書』(東京大学出版会、1986年)で調べてみたが、「鹿野浪衛」の名ではこの資料に掲載されていない。しかしながら、禄高三拾石の「鹿野伴治(後、牧人と改名)」と禄高百貳拾石の「鹿野外守」があり、このどちらかの人物に関係した松代藩士が鹿野浪衛ではないかと思われる。(鹿野外守の親族か?) というのも、『信濃国松代真田家文書』に、以下のような記録があるからである。

「鹿野浪衛他一名拝借証文〔覚〕(差支のため切米金2両2分

受取宛行の内より返上に付)

文久元年酉8月

鹿野浪衛・鹿野伴治(奥印) 佐藤安喜

遠藤小右衛門殿

『史料目録 第91集 信濃国松代真田家文書目録(その12・完)』(2011年3月、国文学研究資料館)

また、鹿野の名は、『象山全集 巻5』(信濃毎日新聞、昭和9～10年)所収、「訂正及門録」にはなく、武田斐三郎の松代藩士官学校の生徒名簿に「鹿野勇之助」と「鹿野道之助」の名がある。このどちらかが後の鹿野浪衛とも思われる。この鹿野浪衛は、「文明開化の写真師—鹿野浪衛・末四郎兄弟」によれば、大元の情報は家伝が何か不明ではあるのだが、以下のように書かれている。

「松代藩の家老だった鹿野浪衛(一八四三～一九一五年)は、佐久間象山の勧めで文明開化を象徴する写真師になるべく、明治維新後、横浜(横山松三郎に師事)で修業をしました。客の多くは外国人でした。その後、横浜と同じ開港市の新潟に向かう途上、一八七三年、長野(現長野市権堂)に一年だけ滞在して写真師の仕事をする。翌年、高田に移動するのですが、結果的にこの地に留まることになるのでした。のちに芝居の大漁座や映画の中劇会館が建つことになる場所(上越市寺町二)で一九〇七年まで営業し、その後同じ町内斜め向かいの現在地に移転しました。」

鹿野浪衛も戊辰戦争後は松代藩士官学校にいたと考えられるので、松代藩士官学校時代にこの鹿野浪衛と武田斐三郎(門人関係)、宮下欽次郎が知り合い(同輩、友人関係)であったと考えてもおかしくはない。さらに武田斐三郎は佐久間象山の門人の一人でもあるし、横山松三郎とは箱館時代の知人でもある。文久2年(1862)2月、幕府健順丸の上海出貿易の実施に先立って、外国貿易の様子を探るために香港へ渡航した際には、武田斐三郎と横山松三郎は一緒に健順丸に乗っているのである。つまり、鹿野浪衛は武田斐三郎の伝手から東京の横山松三郎の門人となった可能性が高いのである。このことが、その後の宮下欽次郎とも関係があるように思われるのでご記憶頂きたい。

(森重和雄)

【参考資料】

『象山全集 巻5』(信濃毎日新聞、昭和9～10年)所収、「訂正及門録」

『史料目録 第89集 信濃国松代真田家文書目録(その10)』
(2009年3月、国文学研究資料館)

『史料目録 第90集 信濃国松代真田家文書目録(その11)』
(2010年3月、国文学研究資料館)

『史料目録 第91集 信濃国松代真田家文書目録(その12・完)』(2011年3月、国文学研究資料館)

2012年12月23日付『新潟日報 上越かわらばん』記事、石塚正英「くびき野学への誘い 文明開化の写真師—鹿野浪衛・末四郎兄弟」

石塚正英『地域文化の沃土 頸城野往還』(社会評論社、2018年)

永井誠吉『松代藩戊辰戦争記』(印刷:コロニー印刷、1990年)